▲昨年もカラマツの植林に参加した丸子修学館の高校生

広がる支援ネット

市民・学生ボランティアが参加して スキー場跡地に森林を復元

長野県長和町（ながわまち）

関東各地の山林で植林や再生、津波被害にあった海岸保安林の復興等の活動を行っているＮＰＯ法人「森のライフスタイル研究所」が、今年３回目の植林として、スキー場跡地を元の森に復元する活動を行った。６月上旬の土曜日、標高１４００ｍの長野県長和町和田峠には、東京からバスでやってきた１００名近いボランティア、大学生、地元の小学生や高校生等１８０名が参加して、土砂降りの中で約２haの斜面に４０００本のカラマツを植樹した。

スキー場を10年かけて元の森に

各地に森を切り開いて作られたスキー場。その多くがバブル経済の崩壊とスキー離れ等で、経営が成り立たなくなり廃業に追い込まれている。中山道の最高地点にあり、霧ヶ峰や白樺湖、美ケ原等と並ぶ観光拠点の一つ和田峠も、旧和田村が冬季の観光にと国有林を借りてスキー場を作ったが、平成14年に閉鎖した。

その山を林野庁に返還することにしたが、スキー場開発以前の形に戻して還すように定められている。それがカラマツ林。木材として不人気のカラマツを植林するなんてと思ったが、標高が高く冬の積雪も多いこの山では広葉樹等は育ちにくいそうで、周辺林と同様のカラマツを植林することになった。

スキー場だった用地は総面積約７・42haの斜面で、植樹するカラマツは計１万７０６６本。植林後10年間手入れ保全してから返還する。すでに昨年の６月に第一回目の植林を行い、１haの斜面に２３００本を植林した。

長和町から相談を受けて森林復元計画を立ててきた長野県林務課が、植林作業の助っ人に考えたのが「森のライフスタイル研究所」だった。同研究所はもともと長野県が森林の保全を市民参加で行っていくために組織した団体で、県と市民、協賛する企業によるＮＰＯ法人になっている。伊那市に本部、東京、栃木、京都にオフィスがあり、年間を通して様々な活動をしている。特に、東京は代表理事所長竹垣英信さんの気さくな人柄とフットワークの良さに加えて、ブログによる参加の呼びかけと活動報告等が注目され、植林経験のない若い人の参加が増え、彼らがリピータ

▲東京から来た参加者が整列。すでに地元の子供たちが植林を開始している

▲挨拶する羽田長和町長

▼きつい斜面を登って行く

◀植林について説明する「森のライフスタイル研究所」竹垣代表理事所長

ーにもなっている。

その日の朝、参加者１００名の乗ったバスは、新宿西口を7時に出発、10時前に和田峠・長和町観光協会が経営する「農の駅」に到着した。あいにくの雨模様のため持参の雨合羽を着て広場に集合した。若い女性の参加が多い。他に長和町小学5年生の「和田みどり少年団」の児童13名、東京農業大学生20名、県内の高校生グループ10数名に地元の住民も参加、総勢１８０名が参加して４０００本のカラマツ苗を植林することになった。

参加費は一人１０００円。これは今後この森の下草刈りや鹿等の被害を防ぐ柵の設置費用に充てるための基金で、すでに鹿の侵入を防御するため数キロに亘って柵を設けている。

バス代等は、毎回企業等からのＮＰＯ事業助成金が充てられるため無料である。

町からは羽田健一郎町長や役場職員、県からは林務課の山口課長等が出迎えて、早速開会式が行われた。

羽田町長は「あいにくの雨で気温は15℃、風邪を引かないように注意してください。ここは標高１４００ｍあり、中山道の難所だった場所ですが、昔ここを京から江戸をめざして和宮皇女が通ったと思えば、感慨もあります。心に残る植林をして、その木がどうなったかを見にまた訪ねてください」と挨拶。県地方事務所林務課の山口課長からは、スキー場跡地の森の復元について説明があり、昨年植えた苗木が立派に育っており、今日の雨天は植物にとって恵みであると述べた。

昼食には、お母さん達が早朝から用意したおにぎりと地元名物のキノコ汁がふるまわれる。その後、近くの長門温泉で休息するようにと無料入浴券も用意された。

「爽やかだ」「とてもいい経験」

竹垣所長の指示で参加者は４班に分かれ、各班ごとに班長がついた。鍬が配られ、「エイエイ・オー」の掛け声と共に出発進行、山に向かう。山は地元ボランティアと森林組合が事前に下草刈りをし、植林する場所にポールを立てている。「この準備こそが大変なんです。皆さんしっかり掘って苗を植えたら、足で踏み固めてください」と班長の池田さんが言う。「森のライフスタイル研究所」が毎年実施している佐久市大沢のヒノキの森作りに参加したのが縁で研修を受け、毎回参加者の指導に当たっている。

地面は雑草や笹の根が張っていて、鍬で掘るのにかなり力がいる。30～40㎝程の穴を掘り、50㎝程に育てた苗木を真っすぐに植える。始めて参加、鍬を持つのも始めてという女性たちは悪戦苦闘しながら、それでも手を休めることなく頑張っている。

きつい斜面を登って行くと、山麓際は土がほくほくしてきて、植林が順調に進行していた。企業から仲間数人で参加している人たち、健康作りを兼ねて一人で参加した男性、研究所が開催する活動にはほぼ毎回来るという中年の女性等、雨足が強くなり霧が出てきた中で皆汗だくになりながら働いている。すぐ近くの林から鶯が鳴いて、歓声の声が上がった。

下の方の斜面では、「和田みどり少年団」の児童と東京農大の学生たちが手際よく植林している。和田小学校では小学5年生が一年間植林や花植え等の緑化活動に参加する習わしだそうで、お揃いの可愛い制服が似合っている。

５ｍ先は見えないほど濃霧が出てきて、山も人も幻想的である。約2時間で４０００本の苗木を植え終えてグループごとに下山しはじめた。「とても清々しい」「味わったことのない経験、いい思い出です」「植えた木が根づくか心配なのでまた来たい」「持参した安いカッパは役立たずでしたので、次はしっかりした作業用のものを用意します」等々、雨と泥と汗で濡れた顔をほころばせて語った。

役場が用意した給水車で顔と手を洗い、テントの中に用意されたおにぎりと暖かいキノコ汁を食べた。作業を終えての少し遅めの昼食を「美味しい」と頬ばる若い女性たちの足

▲指導員から穴の深さや植え方等を聞く始めて参加の女性たち

▶右／会社の同僚が誘いあって参加した大澤さん、大井さん
中／初めて参加したが「凄く楽しい」と語る金田優子さん
左／ほぼ毎回来て黙々と作業する女性

元は泥だらけだが、気にする様子はない。ころなし逞しくなったように見えた。

▲地元の小学生の作業を手伝う東京農大生

東京農大の「山村再生プロジェクト」

前日から長和町に来て農作業等を手伝い、植林でも手慣れた働きぶりが光っていた東京農大生は、植林のあと、続いて別の地域へ防獣用ネットを張る作業に出かけて行った。長和町には月1、2回15～20名が来て、地域住民と交流、協働しながら様々な作業や実習活動を行っているという。

東京農大・国際食料情報学部食料環境経済学科の学生たちが長和町を一つのフィールドワークにして活動する「山村再生プロジェクト」は、学生自らが山村地域の課題を把握して、解決策を考えて実践し、成果を検証して再び実践するという地域再生・活性化の総合プランナーをめざすもの。

平成20年にスタートし、月1度以上、一回の実習で4～7日は滞在、年間延べ2000人の学生が訪れているという。実習では、特に休耕地の再生に力を入れてきた。原野化した農地を再生して年間50種の野菜や水稲を作付けし、その収穫物を使って味噌や漬物作りにも挑戦している。また、学生の視点で地域再生プランを作成して、町会や議会などと意見交換も行ってきた。

24年度のテーマは、さらなる躍進をめざした「地域に学び、地域が育てる山村再生・活性化の人材育成プロジェクト」。学生主導で産学官連携の協働・実習会を行い、収穫農産物の販売マーケティングにも取り組むという。

「山村地域にこそ都会に失われたものがたくさんある。それを活かしていくお手伝いです」と指導に当たる農大の望月洋孝先生は答えた。農大生の活動は地元の高校生にも影響を与え、丸子修学館高校からは今回の植林に13名が参加した。

津波被害の保安林の再生

昨年3・11東日本大震災は東北地方に壊滅的な被害をもたらしたが、比較的知られていないのが九十九里浜を中心とする千葉県の海岸。防風林には塩水と流木・廃材等が流れ込み、樹木が次々枯れている。枯れた木を伐ってチップにして、新たにクロマツ、トベラ、マサキ等を植樹、さらに下草刈り等の作業も担っているのが「森のライフスタイル研究所」の昨年から今年の主要な活動である。

例えば、今年は1～4月には3回、九十九里浜保安林の伐採と林内整備、植林（延べ1万2000本）を行い、7月、8月には下草刈りを行った。参加した東京からのボランティアと地元住民は延べ1000名に迫った。

10月以降も新たな海岸2カ所で保安林の再生を予定している。

また毎年実施してきたのが、佐久市大沢・崩壊林の除伐と地揃え・植林、山火事で燃えた長野県東御市田之尻地区の森にどんぐりの森を作るプロジェクト等。

その都度インターネットで一般市民やリピーターに参加を呼びかけ、人手を確保している。海岸に6000本のクロマツ等を植樹した時は親子連れの参加が多かった。日帰りの日程で実労は3～4時間のため、気軽に参加しやすい。長和町のカラマツ林は9月8日に下草刈りを行い、東京から約50名が参加した。

これらの活動はNPO事業支援として日本たばこ産業、トヨタ自動車、コスモ石油等の助成金で行われており、ほかにチップをペレットに加工して企業が暖房用に使う協力体制もある。参加者にとっては、作業でいい汗をかいた後、温泉に入り、地元特産の昼食を食べたり、地域の人や参加者と交流するのが楽しみの一つになっているようだ。

（文／浅井登美子　写真／小林恵）

▲作業を終えて記念撮影

▶地元の主婦らが用意したおにぎりとキノコ汁に大満悦の参加者たち

●NPO法人森のライフスタイル研究所
本部（伊那市）☎0265-74-7996
東京事務所 ☎03-6427-6369
http://www.slow.gr.jp/